

(略)9月19日から降り出した雨は、刻々と増大して暴風雨となり22日まで降り続いた。特に常呂川上流地方の雨量は意外に多かったため出水が早く、村内においては22日午後4時頃に手師学部落で氾濫し、豪雨とともに夜間になったため惨状は悲惨を極めた。濁流は駆け走るように常呂川からあふれ出し、その水の勢いが激しく耕地を洗い民家を倒壊させた。住民は家具の片付けをする暇もなく、山あるいは高台を目指して避難したが、中には不幸にも逃げ遅れて溺死する人もいた。

手師学方面で氾濫した濁流は次第に流下して午前0時頃太茶苗方面でも氾濫した。常呂川の蛇行がはなはだしい所は流れが悪く、浸水が身の丈になった太茶苗部落約60戸の大半は押し流され、中には下常呂原野まで流失した家もあった。

翌23日午前10時頃になって泥流はついに下常呂原野でも氾濫した。その日は前日までの雨天も回復し、晴天となっていたため住民は出水を予想せず、被害が甚大となった。

当日、村には上流地の野付牛方面から出水したとの電報を受け、午前10時に警鐘を乱打して消防の出動を求めて警戒に当たる一方、馬を走らせて部落の状況を視察し、舟を遡らせて救助を準備中に正午頃17号、12号付近の堤防が決壊。その水の勢いは極めて猛烈でライトコロ川に突入し、川沿方面はもちろん岐阜部落も浸水して鐘沸に流れ下るが水量が増大して流れが悪く、刻々と増水して波を立てながら旋回し土佐部落に激しく流れこみ、3号の低地付近から次第に常呂川に流れこんだ。

堤防の決壊によりまたたく間に下常呂原野全体が湖のようになったことは、いかに水の勢いが猛烈だったかが想像できる。ことさら当日は天候が回復し、誰もこのような惨事を予知せず、家具の片付けはもちろん、一粒の雑穀の持ち出しさえする余裕もなく、身一つで避難または救助隊の舟に収容される者も多数いた。

浸水は24日正午からようやく減少し、浸水が収まってから避難民全員が復帰したのは28日で6日間という長期にわたった。

村は即刻元郵便局の建物を救助本部として救助隊を組織し、要所には公職者を配置した。避難所は市街地付近は公会堂、部落には浸水しなかった家屋を借り上げ罹災した人たちを収容した。市街地では各戸から炊き出しを行い、篤志家の寄贈品を受け、不十分ながらも衣食に窮しないよう努めた。この大洪水の被害は皇室にまで届き、罹災者の救済金として金500円の御下賜があり、罹災者はもちろん村民一同感激した。さらに一般の人たちは金600円の義捐金と多数の物品を拠出し、隣保共助の精神を発揮した。(略)

『土佐郷土史』掲載の文を抜粋・編集

9月19日から22日まで降り続いた豪雨により、常呂川の濁流は23日明け方には手師学部落で氾濫して戸数の大半を押し流し、午前10時頃には川沿全域を襲った。雨はすでに収まり天気は回復している青空の下で水量は刻々と増大し、次第に土佐部落も浸水し始めた。

当時、常呂川上流奥地には巨木が密生して雨水を一時的に支えていたから、下流で出水

するのはいつも雨がやんで10数時間後ないしは1日も経ってからのことであった。

この時、土佐部落の戸数23戸、耕作面積145町6反、その大半はエン麦で62町7反に及び、大小裸麦類がこれに次いで36町、豆類が30町、その他10町であったが、全耕作面積の約50パーセントが水びたしとなり、まだほとんど脱穀していなかった作物は刈ったままか積んだまま、あるいは根こそぎ常呂川とライト川に押し流されていったため、収穫は皆無に近かった。

水かさは3尺から4尺に及び、高波は轟音を伴って狂流し、たちまち2号（水門）あたりから3号付近に滞留し、堀口辰雄の屋敷だけを残すだけで、あたりの一面泥海に変わった。一方、5号付近から西1線の小原安馬宅の裏にまわった水は小島宅の裏山を洗ってライト川に流れこんだ。泥水は次第に部落内あちらこちらの窪地にまわって滞留した。浸水屋敷の前後を低地に囲まれていた小原廣、内藤惣太郎の両家はたちまち濁り水の中に孤立状態で残され、一時は家族の生命の危険にさらされるにいたった。

雨上がりに安心していた上川治、下川治の人びとは思いがけない急激な浸水に家財道具を持ち出す余裕はまったくなく、わずかに身一つで近くのイワケシユ山や川東の山に避難した。土佐3号からは村の消防団員が磯舟で食糧の補給など救護にあたった。浸水は24日正午頃からようやく減退したが、これら避難民全部が復帰できたのは28日頃であったという。

『豊川区開基百年記念誌 ふるさと』掲載の文を抜粋・編集

略（9月19日から台風の通過にともない降り始めた雨が22日まで続き、大雨となった。翌23日には雨も上がり、晴天となったが、上流から増水していた濁流が10時頃から常呂原野一帯に押し寄せ、12号と17号にわずかに造られていた小さな堤防もたちまち押し流され、畑一面が泥水に覆われ未曾有の大洪水となった。この洪水による常呂村の被害は、罹災戸数392戸、流失住宅43戸、溺死者1名、溺死馬16頭と記録されており、村内の半数近い戸数が被害を受けるという大洪水となった。

このため、せっかく掘削した大排水も無と化してしまい、全ての農産物も収穫皆無となり、たび重なる洪水・凶作に疲れ、負債も増加したため耕地を売り渡して離農・転出する部落民は日ごとに増え、開拓以来築いてきた畑も湿原地となってしまふ所が多かった。

略

『共立百年史』掲載の文を抜粋

略（下川治においては斉藤友左衛門氏が消防団の陣頭に立ち、孤立した農家の救援に当たり、旧常呂劇場（注：公会堂の間違い。常呂劇場の完成は昭和11年）に避難させ、村当局もこれに当たった。当時の住居はほとんどが掘り立て小屋で、水が浸水し、小屋はつぶれ、屋根が開いてつぶれ水面に浮かび、その上に人が乗り助けを求めながら流されたそう、上川治の人たちも数戸流されたそうである。この時の水の深さは共立の安藤英一宅

付近では屋根の軒下までの深さに達したそうである。(略)

『ところ文庫30 常呂川…洪水と治水の歴史』掲載の

「北海タイムス」を抜粋・現代文に編集

10月1日付「北海タイムス」

「常呂村からの詳しい報告では22日午後7時、野付牛水量観測所北原氏から常呂川増水199寸(注:約6メートル)で、なお増水のもよとの電報が役場に着き、大柿村長は村会議員と共に市街有志を訪問して協議したが、199寸の増水を信じる者はなく電報の間違いだろつと言う者もいたが、救助出動準備をすることに決め、炊き出しを行い、未明(注:23日)から消防を繰り出したものの既に刻々と増水して12号、17号堤防が決壊した。危険との電報を受けて常呂川に接する岐阜部落に急報した時には路上3尺(注:約91センチメートル)の浸水で、午後2時には岐阜と川沿、常呂村全村が一面の大海と変わり、悲鳴を上げる者、救助を求める者、右往左往しながら避難する者など阿鼻叫喚の修羅場を演じ、救助隊の消防・有志・青年会会員らは危険を冒して馬を逆流の中に入れ、流れを切って救助する者もいれば、舟数隻で救助する者もいた。さながら船合戦の状況のようである文章で表すところではない。渦となった流れと共に農作物は流失して大海に漂った。

ようやく27ヶ所の救護事務所を設け炊き出しを行い、いっきの急場を救ったが、罹災民は急な増水のために何一つ持ち出せず、身一つで逃れたためシャツ1枚の者もいた。有志による衣類その他の寄贈があったが、今回の水害は明治31年の水害以上の被害であり、誰も彼も途方に暮れている。

浸水家屋385戸、手師学では21歳の婦人が濁流に巻き込まれ非業の最期を遂げ、馬6頭、流失家屋6戸、納屋及び小屋76棟。

太茶苗部落は馬10頭、流失家屋12戸、小屋及び納屋43棟。

常呂本村は馬4頭、流失家屋5戸、納屋小屋などはほとんど全滅。

今なお交通が途絶しているので調査不明の箇所は常呂川左岸の幌内・太茶苗・手師学だが、いずれも低地のため全滅しているかもしれない。

農作物は全部流失、腐敗したため罹災民は食糧が1粒もなく、暖を取るにも薪1本ない。寝具・道具などを全部流失してしまった者は今日までの調査で235戸に達し、村長をはじめ有志も手の施しようもなく、ただ共に涙に暮れているほかなし」

「大正8年の水害」 内海アサ子

常呂町高齢者教室『昭和58年度オホーツク大学文集 トーコロ』掲載

(略) 大正8年、その年は大変に作物が良くできた。9月の秋祭りが近づいた頃、突然大雨が降り続き、三日三晩も降り続いた。翌日はからりと晴れ、やれやれの思いで朝を迎えた。その時、遠くの方で「シューシュー」という物音、続いて人々の叫び声です。「水害だ、水害

だ」。耳を疑って聞きましたが、「じつじつ音はますます大きへ、ただならぬようすにあわてふためき、家財道具を片付ける間もなく、水はすくそこまで押し寄せているのです。父は私と妹を押し入れの棚の上に乗せ、必至の動きもむなしく、まとめた物も水の中に落ちたり、もう床の上まで水浸しでした。夕方、私たちは丸木舟に乗せられ避難しました。こうして8年の水害の後、12年まで毎年水害が続き、人々は大きく動揺したのは無理ありません。

「私の思い出」 沢向福松

沢向福松さんは、大正5年3月に胆振国浜厚真から常呂村蠣島

(注：栄浦)に移住。

常呂町高齢者教室「昭和59年度オホーツク大学文集 トーコロ」に

大正8年の水害に関する記述部分を抜粋

(略)大正8年には大水害があり、私の親父の仲の良い友だちが青豆を流れから上げてくれと言われて、畑の中を川崎船で、帆掛け船で走ったこともありました。そこは海のことでした。豚やニワトリが流されてくるのを見ると、農家の人にはお気の毒なものです。

「昔の思い出、現代感想」 大江俊良

常呂町高齢者教室「昭和60年度オホーツク大学文集 トーコロ」

大正8年の水害に関する記述部分を抜粋

(略)私の生まれは旧太茶苗、現在は日吉地区になっております。

大正8年の思い出は、忘れることもできない大洪水でした。

その当時、私は小学校1年生で、畑に出した根木(注：掘り起こした木の根)がどんどん流れ、家にぶつかり、流木が当たるたびにみしきしむ家の音、水の圧力と流木に負けて押し流される家も次から次へとあり、屋根の上で一家がしっかりとつかまっていたのです。

高台の人らが丸木舟で助けに来てようやく山の手に避難することができました。

わずかな食糧だったので、流れて来るカボチャなどで間に合わせたものです。

当時の食生活は裸麦とキビ、イモ、トウモロコシ、カボチャ、食用油はエゴマをすって油代わり、味噌は自分たちの手作りでした。

続いて9年にまた水害、11年と水害連続でした。水を含んだ麦俵はだるまのように丸くなり、俵に指が入らないくらいカチンカチンに堅く、それをそのままでは芽が出てしまうので、大きなハッカ蒸留に使う釜で炒り、それを焼いて食べたものです。それでも食物不足なので手亡(注：インゲン豆)を買ってご飯の中に入れて食べました。(略)

「私の少年・青年時代」 関谷昌一

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和62年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略) 大正8年の秋は大水害があり、人びとの「水が出るぞー」という声に、着物や大事なものをも2階に上げ、終わった時に「ー」という音で外を見ると、6尺くらいの高さで水が向かってくるので、急いで屋根に登り命が助かったそうです。しかし、作物は全部流され、着物は泥水で真っ黒になり、岐阜県に帰ることもできず、親たちは途方に暮れました。ようやく鑑沸の人の舟で高台に上がり、皆さまのお世話になったようです。

*注：関谷さんの家は、現在の岐阜地区西5線9号

「常呂の開拓について」 奥泉勝雄

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略) 大正8年の洪水は記録的にも水位は最高位でした。私の家は高台地で家には水害の被害はない所(注：太茶苗27号、現在の日吉)なので、水害のあるたびに付近の方々が来ました。約12〜13軒の方々が助けてくれということで先に馬と子どもたちを避難に連れてきて、すぐに自宅に戻り農機具及び家財を片付けているうちに増水して歩くことも不可能になり、自宅の梁または屋根に登って助けてくれと叫び、救助舟を求めて舟が来るのを待ち、そのうちに舟が来て次々と私の家に避難して来たものです。(略)

「私の人生とところどころ」 鈴木正

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

(略) 大正8年：私は数え年7才でした。3日3晩、滝のように降り続く雨は一拳に常呂川をあふれ、夕方薄暗くなって激しく降る雨と共に、山と山との間は濁流の渦と化しました。父はあわてて私たちを天井裏に上げ、大事な馬を高いところに移して水びたしになって帰ってきました。

畑も野原も道路も飲み込んだ濁流は農作物を流し、家を流し、逃げ場を失った人びとが流れる屋根の上で助けを呼ぶ声は「おーい、助けてくれー」と何度も叫ぶ声は、闇を通して遠くから段々と近くなり、次第に遠くなっていきました。

天井裏にいる私たちもいつ流れるかわからぬ状態なのでどうすることもできず、じっと闇の中を見つめて涙と共に寒々とした気持ちでした。

私の家から15メートルくらいのところアカダモの太さ80センチ、高さ6メートルくらいの枯れ木に猫が流れ着き、一晩中高い声で鳴き続け、濁流の水音と共に不気味な恐ろしさを感じました。

明けて屋根の上に出てみれば、一面の濁流にはゴミと流木、農産物は麦類と青エンドウ、カボチャやスイカなども流れていきました。時にはアオダイショウという大きなへビも泳

いで流れていきました。

段々腹も減ってきました。母が、天井裏に上がる時イナキビのご飯を炊いたままストーブの上にかけてままだったことに気がつき、父が長い棒の先に力ギを付けて水の中を探して吊り上げ、1日目はやっと空腹を満たしました。夜になっても水は少しも減ってきません。父母が側にいる私たちは恐ろしさも寂しさもあまり感じませんでした。

次の日も濁流とゴミの流れを見ると、アイヌの吉村ラクトクスという人と当時の青年団長の山本政次郎さんが丸木舟でにぎりめしとたくあんの切ったのを人数に応じた数を置いていってくれました。

3日目は水も段々減ってきて水の流れもゆるくなり、夕方には高いところが水面に出てきました。

4日目の朝、目を覚ましたら水はほとんどありませんでした。低いところに流れているだけでした。水の引いた跡は泥の海で、家の中も家財道具も泥だらけで飲み水もありませんでしたから、父や母は私たち子どもの飲食にはよほど苦労したと思います。挽いた麦が青く色の付いたものや芽を出した青エンドウなども食べました。

外米も買って食べました。ご飯を炊く時に変な匂いがしました。できあがった時は真っ白な米のご飯なので期待をはずませ、いざ食べてみると麦のご飯の方がおいしかった。
(略)

「自分史」 大江俊良

大正8年の洪水について

常呂町高齢者教室「昭和63年度オホーツク大学文集 トーコロ」所収から抜粋

私は大正2年4月1日、常呂村太茶苗（福山）部落に生まれました。太茶苗の土地は沖積肥沃な良い土地でした。学校は太茶苗小学校で生徒は60余人でした。

が、恵まれた原野にもこんな災害があるうとは…。それは大正8年の大水害でした。

私は小学校1年生で、隣の家が新築したてなので、お婆さんと2人で隣の家に避難しました。私は、夕暮れの雨が降る中を父母もすぐ隣へ来るのではと思います。それが後で分かったことでしたが、水が速く、深く、もう家から隣まで来れなくなっていたとは。

次の朝、外を見ると驚きました。濁り水がいっぱい、それに切り倒した木がどんどん流出し、家の前に木が集まって、それに押されて家が軋みだしたのです。

それとは知らず、地震だ地震だという橋場さんの声でしたが、地震ではなく、家が流されていたのです。家は約20メートルほど流され、木の切り株で止まったのです。そのことは後で見て分かったことです。(略)

『常呂村並直口誌』から判読可能該当箇所を抜粋（現代文に編集）

9月22日（月）雨風強い

数日来の降雨のため、常呂川取水したので予防準備に着手

9月23日(火) 暴風雨、午前5時頃からようやく晴れ

数日来の降雨のため、常呂川の出水が甚だしい。川沿部落に被害があるようなので午前5時に警鐘を打って消防を召集し、村長以下各吏員が午前6時に常呂橋に集合し、舟を漕行させて各部落の罹災民の救助に努める。

午後2時から罹災救護仮事務所を公会堂に設ける。

午後11時まで消防員、有志、局長、巡査部長巡査と協力して救護に従事する。(略)

9月24日(水) 時々降雨、午後曇り

前日に引き続き水難救護仮事務所で協議。各所と手分けして分担しながら救護事務に従事する。

正午頃からようやく減水。常呂橋橋脚石垣が破損、中央切断低下する。(略)

消防職員、公職者、有志、局長、巡査部長らは当日も救護に努力、炊き出しも同様。収容人員44名増加。

9月25日(木) 晴天

村長、収入役は救護事務所に詰めて救護事務に従事する。

午後0時から郵便局で市外在住の公職者を招集して協議会開催、村長、収入役出席。左記の件協議。

- ・常呂橋出水のため交通危険の状態につき通行者に対する処理
- ・被害者救済案
- ・災害の善後策

9月26日(金) 雨天

被害状況として網走支庁から2名来て調査。

午後1時から郵便局で市街公職者及び16名の集会の上、左記の件協議。

- ・救済会組織
- ・救済実施の準備として村内全部にわたり各戸を敏速に調査をすること